

難波田春夫著『國家と經濟』第一卷(序説)

『經濟』の意義を省みて學術論文の方法に及ぶ

大 熊 信 行

一六

1

學術上の著作にかぎらないが、書名だけで書物が何とかを語りはじめる場合がある。難波田春夫氏の新著はそのやうな一例である。この書物の出現は、廣告を見ただけの讀者にも、何とかを語らなければやまない。手にとつて目次を見た讀者に一層多くのことを示唆するのはもちろんである。著者の序言を一讀したら、讀者はその瞬間から經濟學が何かしら大きな變革期にのぞんでゐることを感じはじめるであらう。といふよりも、漠然たるそのやうな豫感が、この書物によつて動かすべからざるものになつたやうに感じるであらう。しかもこの書物

は『國家と經濟』といふ著作の第一卷序説にあたるのであつて、つゞいて來たるべき第二卷は理念篇とも呼ばるべき古典研究であり、第三卷以下何巻をもつて完成するのか、それさへ知れぬ大著述であるといふにいたつて、この一冊があたへる壓力の豫感は尋常一様のものではなくなつてくる。

理論經濟學がそれ自體として沈滞してゐるといふ觀察はもちろんあたらない。せまく日本だけにかぎつてみても、經濟學の分野における理論活動はむしろ旺盛であり、數理派を中心とする祖述・翻譯・紹介の作業は、近年かなりの分量を加へつゝある。日本の經濟學の發展は、

眼をその方面にそゝいでゐるかぎり、明日もなほ同方向へ前進するのを見るであらう。が、一步退いて他の方面をかへりみるならば、全く新しい光景が展開されつゝあることに驚かざるをえないのも事實である。

それらの活動は數理經濟學にたいする批評としての一面をもつこともあり、マルクス經濟學にたいする批評としての一面をもつこともある。同時になんらかの意味でそれらのものとの關聯をもつて展開されることもある。また全く獨立に新しい立場の宣揚であることもある。

そこまでゆかぬ時にはまづとりあへず歴史または學說史への反省であることもある。それらの新現象に共通なものを概括する名稱はまだないが、それらを貫くものは新しい學問への要求であり、いはゞ時代そのものに根ざした一つの動機であるといふことができる。

いま、難波田氏の新著はそのやうな動機をとにもすることによつて新現象に包括されるものの一つである。のみならず、それを擴大し促進するものの一つであり、十

分にその力をそなへたものだと思ふことができる。書名一つですでに時代に呼びかけるものをもつてゐるといふことは、時代そのものの勢ひであるといへ、著者の問題の出し方の卓拔なることをも證明するものだといはなければならぬであらう。

2

そもそも經濟理論の立場において『國家』の一般的な取扱ひは、まだ十分におこなはれたことがない。

——さういふ意味のドイツの國家學辭典の言葉をわざわざ著者は序言に引用した。さうして『私は全く途のないところに足を踏み入れたのである。何處まで進むことができるか、それは全く疑問である。あるひは單なる彷徨に終つてしまふのかもしれない。しかし私はいま、みづから好んでこの途なきところに分け入る。』といつた。

しかしこれは壯圖である。經濟理論の立場において『國家』の一般的な取扱ひが最初にこの著者によつて意圖されるのだとすれば、これは世界的な壯圖であるとい

つていゝかもしれない。これまでの『經濟學者は殆どつねに國家活動の單なる個々の點を、とくに經濟政策學や財政學において取扱つてゐるにすぎぬ』といふは、右の辭典のいふとほりであらう。しかるに著者は經濟學の立場における『國家』の研究をすでに思ひ立つてゐるのだ。注意を要するのは、それが單なる國家の研究ではなくて、經濟學または經濟理論の立場におけるそれだといふことである。

これは困難なことであるに相違ない。著者はなぜ依然として經濟學の狭い立場に執しつゝ一般的に國家を取扱はねばならないのであらうか、なぜ逆に國家學の廣い立場に立ち、その立場からして經濟の問題を取扱はうとは考へないのであらうか、——これは序言を讀むと同時におきる疑問でもある。本文を讀めばいよゝ深くなる疑問でもある。『私は全く途のないところに足を踏み入れたのである』といふ言葉は著者の矜持でもあるが、同時に著者が信ずる以上の眞實を語るものでもあらう。

3

著者にしたがへば、國家のなかには理念としての國家すなはち『精神』が宿つてゐる。現實的な國家は、そのやうな『精神』と、それに對立する『經濟』とを包括したものである。(二六六・二六七頁)『經濟』はそれみづからの系列としてはつねに『必然』であるが、しかし『精神』の『示し導き』のもとに立つ場合においては『變容』されるであらう。(三六一頁、三八八頁等々)近代における『經濟』の必然性は自己のうちに二つの矛盾を孕む。一つはマルクスによつて説かれた資本主義經濟の矛盾、他の一つはゾムバルトによつて有力に表現された經濟の位置の矛盾(手段たるべき『經濟』が目的化してゐること)である。(三五七、三八〇、三八三頁等)この矛盾の發展は『崩壊』と革命とへではなく、『精神』の導きによる『經濟』の『變容』へ到達しなければならぬ運命にある。——『來るべき時代を建設するものは「精神」である。』(三九九頁)

こゝに『精神』、『經濟』、『必然』、『變容』などといふ用語に、いちいち引用符をもちゐたわけは、原著においてもさうしてあるためだが、いづれも特定の意味をもつことを注意したい。なかんづく『必然』といふ一語である。この著作において、これほど具體的・包括的に用ゐられた含蓄の多角的な用語は他にない。この書物はこの一語によつて包括された問題の廣さと、その方法の巧みさによつて、たゞそれだけでも讀者を惹きつけるに十分な價值をもつ。これに反して、『精神』と『物質』との解釋のごときは讀者を容易に満足せしめないであらうし、『變容』の具體的内容にいたつては想像すらゆるされないのでを不満とするであらう。しかし最も重大なのはこの書にいふところの『經濟』の意味内容である。

4

著者は一體に用語の使用に關してきはめて慎重である。そのあらはれとも見るべきか、全卷悉く引用符にみえられ、重要な用語で引用符のかゝらないものはない。

難波田春夫著「國家と經濟」第一卷（序説）

普通に傍点をうつべきところに引用符が使つてあるからである。にもかゝはらず、個々の用語の内容規定はかならずしも明晰であるとはいへない。二三の重要な用語が、きはめて平板な叙述上の論理の面において、撞球のごとく撞かれてゐるやうな感じをうけるところがないとさへいへない。このことをこゝに告白しておかなければならぬ。あらゆる叙述の背後が著者自身の直観によつて支へられてゐるよりも、外國人の文献によつて支へられてゐるといふ印象を残すことも決して著者のために祝すべきことではない。だが、著者はむしろそれらのことを學問的に良心的に敢てしてゐるのだといふことも疑ふことはできない。

ともあれ『經濟』とは何であらうか？『經濟』とはそれ自體としての系列において『必然』のものであるが、しかし本來において『精神』のもとに服すべきものであり、『精神』の導きによつて現に『變容』すべく運命づけられてゐるものである。『變容』とは何か？『經濟』

がその『意味をとりもどす』ことである。(三八七頁) しかれば『經濟』の意味とは何か? 他のものとの關係における『地位』のことである。他のものとは『精神』であり、『文化』である。『經濟』は誤つてみづからの上にあるべき他のものの『地位』を篡奪し、僭主となつてゐた、その『地位』から引きおろされなければならぬといふのである。——いふまでもない、ゾムバルトの思想である。著者は卷末にいふ、『われわれがこゝまで述べて來た見解は、全面的にゾムバルトのこの見解と一致してゐるのである。』(三九九頁)と。著者はマックス・シェラーとゾムバルトから實によく學んだ。なぜシェラーでなければならぬかは十分明瞭でないが、『精神』と『物質』との解釋がすでにシェラーである。われわれはここでゾムバルトやシェラーを批評することはできない。『精神』や『文化』との關係において、『經濟』がどう位置づけられてゐるかは判明したのであるから、最後に『經濟』の實體が何であるかを問はなければならぬ。む

しろ最初に問ふべきはこの『經濟』そのものの意味である。

5

幸にしてその意味は全卷を通じて繰りかへし説かれてゐる。それはまづ食欲にその最も單純なあらはれをもつ自己保存欲なる『根源的衝動』である。今日においては『無限なる營利欲として規定せられる。』(二五〇頁)それは『根本に於ては醜き利己的衝動に根ざす「惡魔的なもの」に他ならない。』(三二〇、三二二、三三四頁等々)一見して明かである、——著者にとつては『經濟』とは暗黒なる衝動であり、それは性的な(種族的な)衝動から區別された自己保存衝動の發展である。『營利』こそはその近代的形式にほかならない。『營利』がたゞちに『經濟』であり、營利衝動そのものが『經濟』である! この見解はきはめて明瞭に、他に解釋の餘地なく、隨所に述べられてゐる。いふまでもないが、このやうな『經濟』の概念といふ

ものは經濟學ないし經濟理論にたゞさはる人々の概念規定とは全然無關係である。著者はそのことを承知してゐない筈はない。承知しながらなぜこのやうな一般の概念規定を無視した行き方をしたか、それはあひにく説明されてゐない。たゞゾムバルトのいはゆる『經濟時代』(das ökonomische Zeitalter)といふ用語から、かゝる『經濟』の意味が導きだされたものだといふことだけ明白である。(二二四、三二六—三三〇頁等參照)

およそ學者はどんな用語を用ゐるもよく、どんな概念規定を樹立するのも妨げない。要はそれによつてどのやうな體系がたち、その體系によつてどのやうな分析や解釋が可能となり、どのやうな實踐原理が與へられるかである。『經濟』の概念をこのやうに規定することによつて、難波田春夫氏の大著『國家と經濟』は今後いかに完成せんとするのであるか、われわれは多大の懸念とともに少なからぬ關心をその將來にもつ。

一つの體系が哲學におけるごとく自己封鎖的に成立す

難波田春夫著「國家と經濟」第一卷(序説)

る場合は問題ではない。しかし十分客觀的な學說史的展望とともに、現代の科學に通ずる基礎的な諸概念との接觸をたもち、しかも一面には既成の諸體系にたいする批判であり、同時に積極的な構想の表現であらうとするやうな、さういふ著作においては、用語の選定と概念の規定ほど慎重を要するものはない。それが不正當であるか不適當である場合には、想念としてはいかに卓拔であつても、事々にその推理は既成概念との喰ひちがひに惱まざるをえない。最後には自他ともに匙をなげなければならぬ結果をすら惹きおこすであらう。

6

『經濟』、『營利』、『技術』、『經營』などといふ用語の概念規定のために、著者がなんらの苦勞をも通過してゐないことは、この大著述の發端においてわれわれをして一つの杞憂をいだかしめる。『經濟』といふ言葉は、日本語でも衝動に關したものではなく、ヨーロッパ語でも、ギリシャ語でも、衝動に關したものでは少しもない。それ

は本來最も理性的なものの表象であり、最も早くから生活における理性的なものの持続性の秩序として生成したものにたいする名稱である。おとしめられてゐるものは『精神』ではなくて『經濟』それ自體である。これをおとしめたものは私的營利主義である。もつと正しくいへば私的營利の國家的認容である。『經濟』の本質が私的營利の無制限なる認容によつて掩はれ、歪められ、忘却された狀態こそ、營利主義＝經濟にほかならない、——これを『經濟時代』と名づけるにいたつては却て錯覺の深化であり、それは脱却しようとするものの中に逆立ちしたのとおなじである。

ゾムバルトが逆立ちしてゐるのである。言葉を顛倒せしめれば、言葉はそれを使用した人間を顛倒せしめるといふ一例である。

『經濟』の本質を『惡魔的』なりとする考は、近代の營利衝動とその諸結果のみを見てゐる頭腦から發生したものである。そのやうな頭腦が現代の學者のなかにあると

いふ事實そのものが、ゾムバルト自身のいはゆる『經濟時代』の最大特徴だといふことになる。われわれはむしろ『經濟』の意味をその本來の語義にかへし、(日本的にせよ、ギリシヤ的にせよ) 將來においてその意味の高められてゆく狀態を豫想したい。またその狀態に備へるべく用意しなければならぬのではないか？ 政治の優位とか經濟の優位とかいふやうな考へ方・言ひあらはし方も、事物を直觀的に通俗的に呑みこませる評論の方法としては機智に富んでゐるが、總じて學問上のことは機智によつて動くことの乏しいものであることを覺悟せねばならない。

われわれは近代における評論の意義を學問の意義と同等に高く認めることにおいて、おそらく一部の學者と見解を異にする。同時にわれわれは評論と學術論文の方法を峻烈に區別する。それは方法の區別である。わが難波田氏はこの區別を十分深く自覺してをられるに相違ない。

『國家と經濟』第二卷の公刊も近いといふ。第二卷の書評はすでに第一卷の末尾に或る雜誌から轉載されてゐる。この事態は少々理解にくるしむが、とにかく第二卷の公刊は目睫にある。われわれの期待はふくらまざるをえない。十九世紀の美術批評家ジョン・ラスキンは二十歳前後にして近世畫家第一卷を著し、四十一歳にして終卷の第五卷を完成した。第一卷にすでに全體の目次がある。このイギリス人は執拗に青年時代の最初のプランを守り、とにかく各項目の標題だけは更へずに押しとほした。笑ふべきか、讃めべきか、だれにもわからない。わが難波田氏は土方成美博士門下の逸材であり、また博士の協力者である。日本の經濟學がこの著者の明日に期待するところは甚だ大きい。ねがはくは壯大な著作の計畫發表によつて自縛におちいることなく、さらに一層自由なる精神をもつて研究に邁進されることを。——われわれはこの書を著者のいふがまゝに、出發點における『さ

難波田春夫著「國家と經濟」第一卷（序説）

さやかな記念碑』として認めるにとゞめ、著者の學問がむしろこの『記念碑』の上層として築かれるのではないといふ風に考へておきたい。

經濟理論の立場からする國家の一般的な取扱ひが『全く道のないところ』であるのは著者のいふとほりである。國はおろか、家すらも、經濟學によつて曾て十分な取扱ひをうけたことはない。財貨中心の科學としての經濟學が、家をもつて消費經濟の單位とする構想に久しく満足してゐることは、省みれば驚くほかない事態である。*國と家とはしからばどう關係づけられるのであらうか、——これらの問題解明の期待は、まづ日本經濟學における『潑刺たる登場者』にかけられていゝのではあるまいか。

われわれはすでに一方に作田莊一博士の『自然經濟と意志經濟』『國民科學の成立』の兩著をもち、他方には高山岩男氏（京都帝大）の新著『哲學的人間學』を加へ

た。これは經濟哲學への新しい道でもある。和辻博士の『現代日本と町人根性』（『續日本精神史研究』昭和十年）はいまだに經濟學者の觸知せざるもののごとくにとゞまつてゐる。しかしわれわれは個々の窓をとり拂はなければならぬ。難波田氏の新著が何よりもまづ書名によつて清新颯々たる空氣を日本の學界に吹きいれつゝあることは感謝されなければならぬ。若き著者はこの書名によつて永くくるしまなければならぬであらう。が、そのくるしみの重みに耐へてゆく力をも具へてゐるであらう。切に加餐を祈つてやまない次第である。

*拙著『經濟本質論』第二版の序（日本の家について）参照。

（菊判布裝函入・序三頁・目次一頁・本文四〇七頁・
定價參圓・昭和十三年二月・日本評論社）